

# 日本の政党政治

## ヨーロッパと比較して考える

東洋大学教授

加藤秀治郎

西欧の政治勢力は、大きく4つに分けられる(図表1)。それと、日本の「55年体制」では、顕著な違いがあった。「保守」対「革新」の対立機軸がそれである。そこでは、西欧で一般的な社会・経済的争点よりも、外交、防衛、安全保障、教育、憲法が争点であった。そのため、水と油の関係の、共産主義と「社会民主主義=民主社会主義」が明確に分かれず、日本社会党のなかに東側に近い勢力が根強く残っていた。また、別に共産主義者ではないのに、日本を西側に関与させないようにする勢力が、「革新」の側に多かった。また、保守主義と自由主義が分かれず、自民党に混在してきた。

冷戦構造の終結により、日本でもようやく「55年体制」が崩れ、ようやく西欧型の構図に向かうことになるかと思われたが、事態はそのように展開してきていない。

最大の要因は、水で薄めた「保革対立」が続いていることである。「読売・産経」対「朝日・毎日」のように、憲法、安全保障をめぐる対立が根強く続いている。だがこの問題は、世代交代もあり、論争さえすれば決着をみると思う。世論もはっきり憲法改正に向かっている。ただ、「新聞世論」を気にする政治家が決断できないだけである。

これが片付けば、あとは(外交的な)「政争は水際まで」

図表1

西欧の四分法	共産主義	民主社会主義 社会民主主義	自由主義	保守主義
国際政党組織	世界共産 党会議	社会主義 インター	自由主義 インター	国際民主 同盟
社会観	革命	改革	改革	改革に懐疑的
政治体制	人民民主 主義	自由民主主義		
経済体制	計画経済	(混合経済)	市場経済	
イギリスの政党	共産党	労働党	自由民主党	保守党
フランスの政党	共産党	社会党	パール派	シラク派
ドイツの政党	共産党	社会民主党	自由民主党	CDU/CSU

となり、経済・社会政策を基軸に政党が分かれて行く。共産党は、他の党がだらしないので生き残っているだけで、自民党がクリーンになり、民主党が強化されれば、存在理由はなくなる。

そうすると保守主義、自由主義、民社(=社民)の3勢力を中心とする構図に向かう。新進党の頃はそれが不明瞭で、米国型の政策的特色のない政党に向かいかけていたが、今はかなり形が整ってきている。わが国では、2大政党制とは2党の伯仲状況のこととの誤解があり、少しも2大政党に向かわないではないかという人がいるが、「政権交代の可能性を秘めた政党制」という意味の、立派な2大政党制に近づいている。

3勢力がそれぞれ政党とならなくとも、しばらくは「民社=社民」と「自由主義」が民主党にまとまり、自民党に代わりうる政党に発展していくというシナリオには、十分可能性がある(図表2)。

今後の課題には次のものがある。①民主党は憲法論争を果敢に行うこと。小規模の分裂があってもプラスの方が大きい。②連合は社民党との関係をはっきりさせること。同党はドイツの「緑の党」に近くなり、労働組合とは異質の勢力となっている。決着を先延ばしにしているのではない。③民主党は公明党をあてにしないでよいように、組織を強化して行くこと。現状では自民党と二股をかけられ、損しているし、イメージも悪い。

8月4日 三多摩民社協会主催研修会より(要旨)

図表2

